しゃらりん 01 2003/1/1
大阪教区教化委員会機関誌［沙羅林］

教区基本テーマ

私のこと 知らないままで いいのかな。

巨津　圭子さん(67)

「自分を観て　自分を書くのが
山河あるくよりたのしい」、妙好人・
榎本栄一さんの詩です。我執、悪念、邪念、煩悩が渦巻く私の心ですが、同時にそんな凡夫を大らかに包んで生死させている如来（自然）を感知する心を持っているはずの私です。いろいろな師におしえられながら、その悲しみを知り、そのよろこびを知ります。“知らないままで”では決して気付かない“生かされている私のいのち”は、何やらうれしい、はずかしい、いのちです。

田代　隆慶さん(15)

このテーマを初めて聞いた時、
僕は知らなあかんなぁと思いながらも、
実際めっちゃ難しいなぁと思った。僕は、自分のことって自分が一番分かっているようで、一番分かっていないことだと思う。だから、自分のいい所も悪い所も、別の人に言ってもらわないと分からないし、また、自分が別の人にいい所とか、悪い所とかそういうことも、その人のためになるから、重要なことだと思ったし、そういう風に思うと、この教区のテーマは、「人と人とのつながり、『縁』というものを大切にしよう」と言っているようにも見えた。人との縁を大切にしていれば、自ずと縁が広がってくるものだと思うし、これも大切なことだと思う。いろんなことを機縁として、新しい縁を広げていくことも大切だと思う。

澤田　了さん(66)

このテーマを知った時、すぐに頭に浮かんだのは、清沢満之の「自己とは何ぞや、これ人生の根本的問題なり」というお言葉であります。このことは、真宗の信心の歴史と言えます。私達はこの世に生をうけたことはまぎれもない事実であり、すでにこの歴史の道に生きていると言えましょう。そのことに目ざめることがこのテーマの、問いかけであると思い、自分を知らないまま人生を終えることほど空しいことはないと先人が教えています。どうしても会わねばならないのが自分自身との出会いでありましょう。それにはただ「聞」以外にないと教えられました。

久世　貴子さん(23)

私を含め、ほとんどの人が、『自分』のことを一番知っているのは、自分だと思いがちです。自分が「これが『自分』だ」と思い込んでいる『自分』は、意外と的外れです。そして時と場合によって、自分に対する見方は常に変化し、『自分』がわからなくなってしまいます。ということは、『自分』を一番知らないのは実は、自分自身なのです。

自分を知ることは、これからの人生を空過させないためにも『自分』を見つめ、知ることが大切だと思います。

1p
教区内の方々に、教区基本テーマを聞いて感じることを綴っていただきました。

2p
「ハンセン病パネル展・邑久光明園作品展」の報告に加え、大阪市で実施された「外島保護院記念碑参拝」のレポートです。

3p
教区の教化機関である「出版会議」・「ボランティア推進会議」の紹介と、出版物紹介コーナー「BOOK しゃらりん堂」。

4～5p
教区教化委員会の講座の様子をお伝えする「シリーズ 聞く」。今回は、聖典講座を取り上げました。

6p
教区内諸団体の活動を紹介します。今回は、仏教青年会連盟と児童連盟に寄稿いただきました。

7p
教区教化委員会が継続して取り組んでいる教区指定同朋の会。第27組即徳寺さんの様子をご紹介します。

8p
南御堂周辺のお店紹介「ちょっといこか」と、マンガ「しゃらりんちゃん」。

ハンセン病パネル展・邑（おく）久光明園作品展を開催

―行事部／ハンセン病交流会実行委員会

去る2002年10月25日から28日まで、難波別院報恩講にあわせ、教区教化委員会では、ハンセン病パネル展及び邑久光明園作品展を開催しました。

この展示は、わたしたちは「ハンセン病は恐ろしい病気」という意識を完全にぬぐい去ることは難しく、無意識のうちに真実に眼を閉じ、問題を遠ざけているのではないか、という現状認識に真向かい、一人でも多くの方々にハンセン病に対する正しい理解を深めていただくことを願って開催されたものです。

開催期間中は、約270人の方が訪れ、パネルや作品に見入っておられました。

訪れた方からは、

「本でハンセン病の方々のことはよく知っていた。でも未だに知識不足による差別があるのはとてもつらいと思う」（42歳・女性）

「今回パネル展を見て初めて知ったことばかりです。もっとたくさんの資料があったらなあとも思いました」（31歳・男性）

「心のこもった美しい作品でした」（34歳・男性）

「すごくきれいです。作品の紫の犬が特に好きです。写真もきれいです。私もこんなのが作りたいです」（6歳・女性）

など数多くの感想が寄せられました。

また26日には、作品を提供していただいた国立邑久光明園在園者の方々が報恩講に参拝される機会に併せ、教区教化委員会との2回目の交流会がもたれました。

今回は、ハンセン病療養所から退所され、現在、大阪府内に住まわれている方も参加されており、その方は、交流会の場で、「2001年の5月に熊本地方裁判所が、『らい予防法』違憲国家賠償請求訴訟」において、原告の訴えをほぼ認める判決を出され、これを契機に、ハンセン病に対する高い関心が一般に寄せられたこともあり、我々も強い意志が芽生えた。社会に身を置くということは、地域社会とのつながり、人間関係のつながりが非常に大切であり、そういったつながりの中に生きているということを痛感している」と話されました。

こうしたお話を聞き、また在園される方々との会話をとおし、私自身は、ハンセン病問題を考えることは、人間が人間として生きるということを問うことなのだと、改めて考えさせられる場となりました。

外島保養院記念碑参拝レポート

現在、実行委員会が交流を続けている岡山県邑久光明園は、1934年（昭9）まで大阪の淀川と神崎川に挟まれ、大阪湾に面した中洲に外島保養院として在りました。同年9月21日、室戸台風の襲来により施設は壊滅流失し、患者173名、職員3名、職員の家族11名が死亡されました。その地に、1997年11月、記念碑が建立され、毎年9月に園からバスで園長、自治会の方々、そして当時の生存者の人が参拝に来られます。実行委員の方々と共に式典に参加し、生存者の人から当時の様子を伺い、この海抜ゼロメートルの地で起きた大惨事に、胸が悼みました。他の団体の方々も参加されていて、委員の人たちはパネル展へのお誘いや名刺交換をされていて、出会いの場でもありました。（渡邉）

出版会議

大阪教区における真宗同朋会運動のより一層の推進を図るべく、時代社会に適応した教区の教化体制が構築される中、文書伝道を審議・調整する機関としてこの「出版会議」が設置されました。さらに、その活動をいよいよ円滑に行うため、「出版物及び視聴覚伝道教材特別会計」が設定されたことは、誠に時宜を得たものであると理解しています。

さて、出版会議のこれまでの活動内容は、『真宗入門Q＆A』及び『教区同朋大会記念講演録』の発行、教区基本テーマポスター及び同リーフレットの作成、教化委員会が制作した『シロの聞法見聞録』で取り上げた「清め塩」に関する教化リーフレット「真宗門徒と仏事」の編集（発行及び頒布は難波別院）などであります。特に、『真宗入門Q＆A』は、既に三千部以上が有償頒布され、今なお購入のご要望を教区内外から頂戴しておりますことは、本当によろこばしいことであります。

また、現在は『清沢満之語録』の編集を進めるとともに、お内仏のある生活をテーマとした教化ビデオ『シロの聞法見聞録②』の制作に併せ、そのテーマがより浸透することを願った教化リーフレットの編集に取り組んでおります。これらも近々に発行する運びとなっておりますので、よろしくご活用いただきますようお願い申し上げます。

いずれにいたしましても、こうした文書伝道に関する組織が設置されたのは、大阪教区が有する地域性や教区の方々の要望を見据えつつ、寺院・教会のより一層の活性化に繋がるような出版物の発行を願ってのことであり、また、幸いにも多くある教区の教化機関との具体的な連携をもって、幅広い、深みのある教化活動の展開を目指したものであると了解しています。今後も、そうした願いを活動の基底に据え歩んでいきたいと思いますので、どうか皆さまには、ご意見やご要望をお聞かせくださいますようお願いいたします。

（出版会議主査・奥林　暁さん）

ボランティア推進会議

「釜が崎の越冬対策に少しでも協力できないかな」「お正月のお鏡もちを活用できたらいいな」「古着も毎年必要だと聞いている」、そういう委員の発言から、おもちから始まるコミュニティ、おもち供出ボランティアの企画が考え出され、お正月のお供えした後の鏡もちと古着供出の協力依頼を教区内全寺院にチラシでお願いしました。30件余りの協力があり、まる1日もち切りをして、おもちにもそれぞれ個性があり、表情があることを発見しました。

1月11日の夕方の炊き出しの時間までに届けられるようにと、教務所を四時に出発するために、10人程の人員でワゴン車、乗用車2台に積み込み釜が崎に向かいました。委員以外に一般の門徒さん2人が、カビ取りボランティアに来てくださり、その方々が一緒に釜が崎までお付き合いくださいました。

炊き出しの食事の配給に、５００人余りの長蛇の列を目の当たりにし、その方は、「当初若い頃に働かずに遊んでいた人が行き場が無く、ここに来ていると決めつけていましたが、そうではなく不況の厳しさ、しわよせが一番顕著に出ているのがこの釜が崎だと、自分の傲慢な見方、私の認識不足を気付かされました。」と言われました。

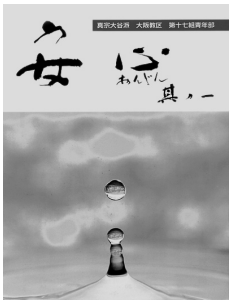
２００３年も1月9・10日と「おもち」「古着」（今回は、醤油・みりん・お酒・お米などもありがたく）のご協力をお願いします。

（ボランティア推進会議主査・松本 曜一さん）

このたび17組青年部から、「安心」と題された小冊子を出版いたしました。組内の若手で構成されている17組青年部では、青年部での学びや、日ごろ語り合っていることを形にしてみたいという願いから「安心」の製作に取りかかることとなりました。

組内の先輩住職に［法話］として筆をとってもらい、青年部員からは［研究発表］として、今自分の問題になっていることを語り、そして［同朋の声］では、ご門徒からの貴重なメッセージをいただいています。また日々逮夜参りに悪戦苦闘している若手ならでわのページとして［QアンドA］や［お参り日記］と多種多彩で非常に柔らかい読み物となっています。

青年部では冊子を作るということを通して、一文字一文字を丁寧に何度も読み直すことがそのまま学習会のようになり、また新らたな語り合いの場が持てたことと思います。



「安心」　発行：17 組青年部
1 部 100 円
連絡先：第 17 組蓮信寺　相馬方行
〒 577-0841
東大阪市足代 1-15-10
TEL06-6721-8923

シリーズ●聞く

●聖典講座・真宗学基礎講座『高僧和讃』

講師／大谷大学専任講師・三木　彰円　先生

本誌の取材で、去年10月11日に行われた聖典講座に参加しました。第1回ということで、私達がご和讃とどのように向きあっているのかという視点から、ご和讃全般についてのお話でした。

「ご和讃を頭で解釈するのではなく、声に出して読み、宗祖の教えを何も付け足さず、水で薄めず、そのまま伝えていく」と述べられ、また「宗祖のご和讃作成は、教化者としてではなく、どこまでも感動の表現、讃嘆の言葉としての姿勢である」と聞かせていただきました。私は今迄、ご和讃がどうして当時の人々に響いたのか疑問でした。決して解りやすいとは思えず、やわらげという意味に引っかかっていましたが、「くり返しくり返し声に出して読む」ことによって響いてくる言葉に出会い、そのことが生きる力になってくると教えていただき、私は、ご和讃を頭で理解しようと向き合っていたことに気付かせていただきました。

後半、「宗祖にとって何故七祖なのか、またそれが何故、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空なのか」というお話でしたが、私はこのような疑問を持ったことがありませんでした。宗祖の教えを学ぶ者として、持ってしかるべき疑問でなかったかと思い、今迄解ったこととしていた宗祖のお言葉を、ひとつずつ確かめていくことの大切さを感じました。

2時間があっという間に過ぎました。一つ残念だったのは、質問の時間が用意されていなかった？ことです。（渡邉）

■講義要旨

金子大榮先生は、「念仏を法として、和讃を義（いわれ）として、その日その日の道とする」という言葉で、私たちが和讃に学ぶことの大切な意義を教えておられます。その意味で、『正信偈』『和讃』を開版した蓮如上人は、宗祖の教えを自らに確認し、その教えのとおりに伝えていくという点に、大切な意義を見出されていたと思います。

蓮如上人をとおして和讃が真宗門徒に身近になったことはいうまでもありませんが、同時に宗祖においても、また、宗祖と共に生きていった同行においても、和讃はもとより声に出してとなえるものであったことも忘れてはならないと思います。和讃とは、声に出してとなえ、それを耳にすることで教えに頷いていくものであるのです。

『浄土和讃』と『高僧和讃』が、『教行信証』と深い関わりがあるという視点から和讃を見直すとき、和讃に表現されているのは、「総序」に表現されるように、如来の深い恩徳を明らかに知り得たという宗祖の感動です。それは直接的には法然上人との出遇いの意味が明確になったというよろこびでありますが、その感動を教えに確かめつつ、教えを讃嘆するという点に、宗祖における和讃の性格があります。

和讃に表現される讃嘆の性格について、和語讃嘆（やまと言葉）、和解讃嘆（理解しやすく）、応和讃嘆（共に声にしていく）ということが言われています。仏教において讃嘆とは「声にしてほめたたえる」ことを意味しますが、法然上人との出遇い、教えとの出遇いが宗祖に明確になったからこそ、そこにご自身の言葉による讃嘆（和語）が生まれた。それゆえその言葉は、宗祖と歩みを共にする同行達にも教えを頷くわかりやすい言葉として（和解）伝達されていき、そこに共に声にしてとなえ、唱和していく（応和）ということが成立した。讃嘆におけるこの和語・和解・応和という性格は、このような関わりのもとに、そこに具体的な広がりを生み出していくのだと思います。仏教に出遇い、その慶びを讃嘆し、表現するということは、必ずそれが他に伝達され、共に往生人として歩むという事実を人間に生み出す。ここに宗祖の和讃の大切な性格があると言えます。その意味で蓮如上人の真宗再興の基点には、和讃があったと思うのです。

『教行信証』は同行と宗祖との関わりの中から著されたものです。宗祖が『教行信証』に明らかにする浄土真宗とは、「いなかのひとびと」が頷いた仏教にほかなりません。それゆえ宗祖の讃嘆の言葉は、同行である「いなかのひとびと」にとって、論理や理屈でなく自らの頷きとして一致できるものであったと思います。

和讃は念仏の生活と共にあるものであり、人間として生きることの根幹に関わるものです。人間の知性としてわかる、わからないではなく、和讃を口にしつつ生き、生きる方向や力をそこに見出していく。この点に私たちが和讃に学ぶことの大切さがあると思います。『正信偈』『和讃』のお勤めとは、単に形式としてなされるべきものではなく、宗祖のお言葉をとおして、私自身が教えに触れることを願い、教えに出遇っていく者となるというところになされるべきことであると考えます。

●聖典講座・仏教学基礎講座『涅槃経』

講師／大谷大学教授・宮下　晴輝　先生

去年11月13日に行われた聖典講座に参加しました。息を切らし時間ギリギリに駆けつけた僕とは対照的に、開講前の教化センター講義室は、ほぼ満席に近い人たちが和やかな雰囲気のなかで、それぞれに談笑されていました。

近くの席から初老のご婦人と思われる方が「今日が第1回って聞いたから来ました。また聖典講座に続けて来たいです」と話されている声が聞こえてきます。いろいろな講座に参加されているのでしょうか。「続けて」という言葉から聞法されておられるだなぁ、という印象を受けました。

さて、講義の方は、仏教学とは一体何なのかということから始まり、「一言で言うなら釈尊観である」とし、また仏教の歴史は「その時代、その時代が生みだした釈尊観の歴史でもある」と語られ、そして仏教経典を大きく二つに分けると阿含経典と大乗経典となり、阿含経典での涅槃は釈尊の涅槃のみを説き、大乗経典になってさらに積極的な表現として涅槃経は展開されていると、これからの講義の面白さを持たせたまま第1回を終わられました。

講義全体を通し首尾一貫して「仏教そのものが、一体何を問題にしているのかを考えないと、経典そのものが私たちに訴えていることが見えてこない」と語られる講師から、聖典を学ぶのは遠い昔の話を学ぶのでなく、今の貴方を学ぶのだというようなことを言われているような感じを受けました。（廣瀬）

■講義要旨

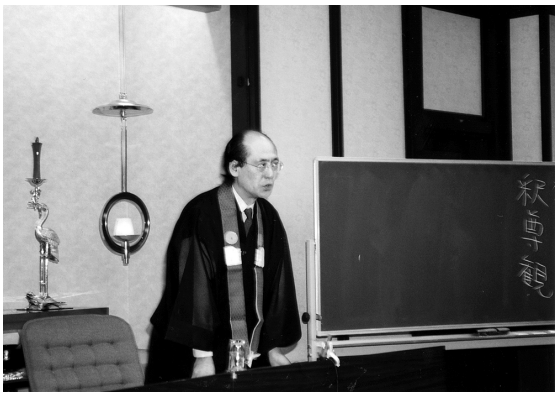
私は、釈尊とはどういう方であるのかという釈尊観を学ぶことが仏教学であり、仏教の歴史とは釈尊観の歴史であると考えています。

仏教経典は、阿含経典と大乗経典に大きく分類できます。阿含経典は釈尊入滅直後、紀元前五世紀から四世紀頃に成立し、伝承されてきました。一方、大乗経典は紀元前後頃に生まれました。どちらも釈尊の教説を伝えるものですが、経典の成立時期や背景が異なっています。ここで注意すべきことは、これら二種類の経典にはそれぞれの釈尊観があり、その釈尊観をもとにした釈尊の教説があるということです。

なぜ歴史上に実在した釈尊の見方が変わるのか。ここでは、客観的に歴史上の釈尊を明らかにする立場で見た釈尊を「歴史的実像としての釈尊」とします。それに対し、見るものによって釈尊が変わる、つまり釈尊観は動くという立場からの釈尊を「信仰的実像としての釈尊」と言いましょう。経典で教説を説く釈尊は信仰的実像としての釈尊です。この視点は、経典を学ぶ上で非常に重要です。客観的に仏教の歴史を見ようとするとき、歴史的記録はありませんから、阿含経典などの経典から推測しようとします。しかし、経典は記録を目的にしたものではありません。経典は信仰的実像としての釈尊の教説を伝えたものです。信仰的実像と申しましたが、問題はその信仰の内実です。仏教徒の信仰を明確にする、このことは極めて大切な事柄です。

『涅槃経』という経題は略称で、正式には『大般涅槃経』といいます。阿含経典にも大乗経典にも経題を全く同じにする経典があります。したがって、それぞれの釈尊観に基づいた『大般涅槃経』が二つあるわけです。まず「大般涅槃」とは何か。釈尊がその生涯を終えられたことを「偉大なる般涅槃」と呼びました。経典には「涅槃」ともあるいは「般涅槃」ともあります。「涅槃」とは仏教徒だけの課題ではありません。涅槃は全ての沙門の目標であり、苦しみが消滅した静寂さを表わします。ただ、その苦しみあるいはその原因を、それぞれの沙門がどのようなものとして見たかによって、涅槃の内実も違います。そのような沙門達のことは「六師外道」の説として『涅槃経』に説かれています。基本的には沙門達は、その苦しみの重さを輪廻の苦しみとして捉えています。そこから解放された世界が涅槃といわれます。釈尊は三十五歳のときに涅槃を獲得され仏陀と呼ばれることになりました。「涅槃」も「般涅槃」も言葉としてはほぼ同様の意味なのですが、仏弟子である阿羅漢の死や釈尊の死を「般涅槃した」と受け止めてきました。したがって、この「般涅槃」という言葉は死を指して用いられますが、死を意味するのではありません。仏道を求めて歩んできたものが、どういう生命を生きて死んでいったのかという、その人の生涯あるいは生命の意味を「般涅槃」という言葉で受け止めたのです。そして特に釈尊の死を「偉大なる般涅槃」と呼んだのです。

仏教は何を問題にしたのか、仏教の問題領域とは何かを明らかにすることによって、また涅槃の意味も明らかになります。その問題領域を表すものの一つが渇愛です。仏教では渇愛という言葉で何を問題にしているのか。仏教における涅槃は「渇愛の消滅」です。釈尊は渇愛を人間にとってどういう問題として捉えたのか、それが阿含経典の中心のテーマの一つです。また、宗祖は「成等覚証大涅槃」とおっしゃっています。これは宗祖の仏道観において明らかにされていることです。今後は、これらの問題が、仏教の歴史の中でどのように確かめられてきたのかをたずねていきたいと思います。



各種団体活動報告

仏青連盟

いよいよ今年3月、第4回目となる『仏教青年研修会（仏青研）』が開催される。思い起こせば、この仏青研が始まったきっかけにはいろいろな願いがあった。一つは、仏教青年会という青少年の活動の場において、我々自身が「本当に青少年と出会っていこうとする歩みをしているのか」「本当に青少年の現状を抱えることのできる歩みをしているのか」という疑問が浮かび上がった。青少年教化、青少年育成という大きな課題を背負いながら歩んできた仏青であったが、なかなかその実があがらない。なぜなら、単純にその青少年と直接出遇っていく場がなかったからである。机上の論理がいかにも、青少年の問題に関わっているかのように勘違いしている我々の姿があったからである。毎日、『不登校』『いじめ』『援助交際』『自殺』……と報道を聞いていても、何食わぬ顔で他人事として生活している我々の有り様が問われていたのだと思う。そのような中、「青少年と共に聞いていきたい」という願いのもと、仏青研は始まった。

次に、そのテーマであるが、毎年「五感を研ぎ澄ませ!!」をテーマに掲げている。これは、当会員の友人で、「筋ジストロフィー」という病と闘う青年との出会いがきっかけであった。病に苦しみながらも、それを受け止め、必死で生きようとする意欲と、進行する病状の中、残された五感を存分に使って、いのちの表現をするその姿に我々は大きな衝撃と感銘を受けた。言うまでもなく五感とは、「視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚」の五つの感覚をいうが、我々は普段の生活の中でどれほどその与えられた感覚をつかい、生きているのか？　また、それを表現しているのか？　『本当に生きる』ということばがあるが、それはこれらの感覚で受けたものを、素直に表現していくことから始まっていくのだと思う。

そして、その表現をもとに、参加者それぞれが共に語り合っていく場として仏青研を今年も迎えたい。

（仏青委員長・藤並　慈さん）

児童連盟

児童連盟では、子どもがお寺の門をくぐって仏さまに手を合わせる、お寺の子ども会を身近なものに感じてもらうということを願いとして、小学2年生から中学3年生までの子どもを対象に、毎年8月のお盆過ぎ頃に「サマーキャンプ」を開催しています。

このキャンプの班はたて割り構成で、中学生のお兄さんやお姉さんは小さい子どもの面倒を見て、高校生以上はリーダーや本部スタッフをしていただいています。

期間中、子ども達は飯ごう炊さんや工作、キャンプファイヤー等楽しい盛りだくさんの企画を自分達だけで、あるいはリーダーに手伝ってもらったりしながらたいへん充実した顔をしてすごしています。

最近は高校生の方でも「中学校卒業まで参加させてもらったので、これからはリーダーとしてお返しをしたい」と希望してくれるようになってきました。

旅行や自然学習等、様々な体験を通して活動していく中で「ほとけ様の教え」は特別なものではなく、何気ない会話や生活のいたるところにあること、私自身も仏さまに願われている存在であるということを子どもなりに自覚してもらえる機会になればと思っております。今年も多数のご参加お待ちしています。

（児連委員長・新川隆教さん）

●感想文抜粋

ぼくは、サマーキャンプに行ったのは今回が初めてで友達もあんまりできなかっただけど飯ごう炊さんの時や、夜のつどい、フィールドサーチ、キャンプファイヤーなどでだんだん協力できるようになって、班のみんななかよくなったりできました。

でも活動する時に列が一列にきれいになってなかったりリーダーにめいわくをかけたりしてしまうという悪い事もありました。というような事でサマーキャンプは良い悪いの重なりでした。しかし、そのようなことで夏の思い出になることはいっぱいでした。

今回のサマーキャンプでは大切なものってなに？のテーマだったけど、それが友達の事を思って助けるなどの友情なんだと分かりました。サマーキャンプ楽しかったです。

（小学校6年生）

アラカルト 教区

教区指定同朋の会

27組・即得寺

今回は27組即得寺さんで行なわれている「教区指定同朋会」にお邪魔してきました。この事業は、研修・講座部担当で、推進員養成講座終了組の寺院（単独若しくは共同）を指定し（3ヵ寺）、同朋の会の結成と充実を目指し、同朋奉讃勤行式のおけいこなどを交えながら実施しています。現在27組では一昨年2回目の推進養成講座が終了し、組内で同朋の会が未結成の正念寺さんと、休会中の即得寺さんの2ヵ寺が選ばれました。講師は正念寺さんが戸次公正さん。即得寺さんは當麻秀圓さんが担当されています。

即得寺さんでは、今回２００２年10月19日（土）午後7時より8回目の会が、参加者25名で開かれました。同朋唱和の後、おつとめのけいこ。みんな恥ずかしがらずに大きな声で練習されていました。休憩のあと先生のお話が始まりました。「願い」について、私たちの願いごとの例を取り上げ、如来の本願について話を進められました。質疑応答の後、9時に解散となりました。

■門徒会長の土井篤郎さんのお話

「この機会について、昭和43年から30年続いてきた同朋の会が、参加者の高齢化と諸々の事情で休会していました。推進員とならせていただき、この機会に門徒会の若手を中心とした集いになってほしいと呼びかけをしました」

●参加者について

「参加者は40名を越え、8割が女性で、40代～60代前半の方々です」

●今日の会について

「今日は農繁期でもあり、村の秋祭りとも重なって参加者がいつもより少ないです」

●お勤めのけいこについて

「1回目に比べるとみんな声が出てきた。この辺では、門徒の方の通夜の席で、正信偈をみんなで勤める風習がまだ残っている。この機会にしっかり学んでもらい、それぞれ調声ができるぐらいになってほしい」

●先生の講義について

「身近なことをテーマに、話がわかりやすい」

●今後については

「10回の講座が終了すれば、同朋の会を継続し、年に一度はみんな揃ってご本山に参拝したい」

■参加者の声

・女性「参加させていただいてから、主人と毎日お内仏で正信偈を勤めるようになった」

・男性「先生の話は聞いている時はうなずくが、すぐ忘れてしまう。正信偈を1行づつ学校のように学ぶ方が頭に入るように思う」

・女性「先生の話は、生活の中での話をしてくださるので、気付かされたり、うなずかされたりする」

●『参加してよかったですか』の質問に全員手を上げて返事をしていただきました。

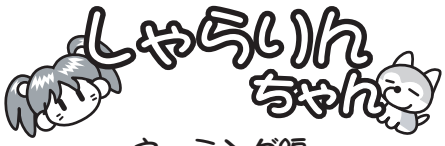
■坊守さんのお話

「当初総代役員さんや推進員さんが中心に参加者の呼びかけをし、本堂の掃除や準備までしていただきました。今では参加者が自主的に早く来て、準備をしてくださるようになりました」

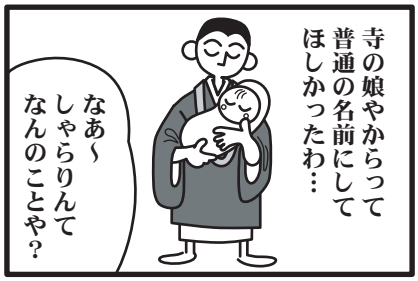
■講師當麻先生のお話

「女性の参加者は熱心で、男性の方は仕事の都合であろうが休みがち。話を継続させて行きたいが、なかなか難しい。10回終わっても聞法会として続いていってほしい」

●参加させていただき、役員さんが熱心で、参加者も真剣であること。でも肩に力が入っているだけでなく、休憩時間にお茶を飲みながらみんなで和気あいあいと談笑しているすがたに、今後の同朋の会が継続されていくであろう力強さを感じることができました。（松林）



ネーミング編



・・・というわけでワンちゃんの名前、募集中で～す

■南御堂周辺のお店紹介

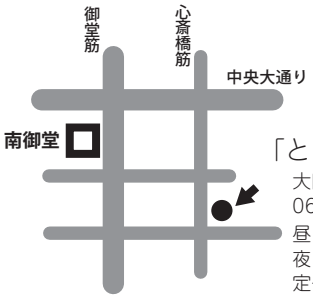
南久宝寺町「とりあえず」

南御堂をしり目に、心斎橋筋へと流れる一行の目的は美味しい料理と旨いお酒。ほどなくたどり着いたお店が今回紹介する『とりあえず』。細い木製の階段を降りると、竹を使い和風漂う、スッキリとした清潔感のある空間が広がる。

さて、“とりあえずビール”と言っておきながら、料理の方は［明太子のだし巻き］や［豚トロ炙り焼き］などおっちゃんの好みそうなものもあれば、［ペペロンチーノ］や［帆立のクリームグラタン］までお連れする年齢層の巾も広がりそうなFood Menu.

お酒の方も地酒や焼酎もたくさん揃っていて、山形の超辛口『くどき上手ばくれん』はお薦めです。教化委員会での疲れを癒しに、はたまたたったいま聴聞してきた講座について信仰談義を交わしてみては。ゆったりとしたスペースの掘りごたつ式お座敷は25～30名のご宴会や打ち上げに最適。

ちなみにしゃらりん編集部調査部隊が調査に行ったところ、ほどよく呑んで、ほどよく食べて一人3,000円でお釣りがあったぐらいでした。（廣瀬）



「とりあえず」
大阪市中央区南久宝寺町 3-4-14 三興ビル B1
06-6252-0557
昼 ● AM11:30 - PM2:00
夜 ● PM5:30 - PM10:30
定休日●日・祝

編集後記

◆「しゃらりん」第1号をお届けします。◆近年、ネットの普及や印刷技術の向上などで、特権的な情報の出し手とその他大勢の情報をただ受け取るだけの階層、という従来の図式が崩れつつあると感じます。誰もが自由に情報を発することができるようになり、その質は玉石混淆で量は爆発的に増えています。そんな中、情報の大海で溺れてしまわないためには、一人ひとりが確かな「よりどころ」を持たなくてはいけないのでしょう。◆そしてもうひとつ言えるのは、今こそ私たちは、出すべき「もの」を本当に持っているのか、が問われているのだということです。それは個人単位でも、お寺としてでも、教区や教団としてでも言えることだと思います。◆「しゃらりん」の編集に関わらせていただいて、そのようなことを感じています。教区のみなさんが情報を発信し、交流する場として、この「しゃらりん」を利用していただければいいなと思っております。今後ともみなさまのご参加、ご協力どうぞよろしくお願いいたします。（S）

発行日：2003年1月1日
発行所：真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町 4-1-11
06-6251-4720
発行人：比良正士
編集：第4組　常榮寺・久世貴子
第12組　清澤寺・澤田　見
第12組　乗雲寺・渡邉延江
第17組　法観寺・廣瀬　俊
第27組　真善寺・松林俊明
イラスト：第27組　願隨寺・平野圭晋
http://www.icho.gr.jp/syararin/